

第18号

2019年10月

# きらら坂

関西セミナーハウス活動センターだより

## 磁場の力

榎本榮次

太陽の周りを水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星という8つの惑星が回っている。この惑星には、太陽から熱と光だけではなく、太陽風というのが吹き続けている。風といっても地球で吹く風とは全く違い、飛んでいるのは電子やイオンで、人体に感じることはない。しかし人体の細胞を破壊するほど大きなエネルギーを持っている。この太陽風がそのまま地表に届けば生命はダメージを与えられてしまう。太陽に近い金星、地球、火星には強い太陽風が吹きつけている。そのために金星、火星は現在、生命が存在するとは考えられない。

それではなぜ地球にだけ生命が存在するのか。地球には、磁場があるから守られているのだそうだ。地球の地核には鉄の塊があり、その上を溶けた鉄がうごめいており、その上に岩石と水がある。そのために北極と南極にNSという磁場を持っていて大きな磁石のようなものになっている。太陽の風はこの磁場に当たれば曲げられて弱くなる。それで地球は守られているという。火星や金星には磁場がない。

物理学では、方向性のある力をベクトルといい、方向性のない量だけの力はスカラーという。地球を守っているのはこのベクトルである。どこに行っても常に磁場というベクトルが働き、それが地球を守っているのだ。「京大変人講座」三笠書房

そこで少し思いを飛躍してみたい。はた

してこの世界、この人類を守っているのは何だろうか。武力だろうか。それとも経済力か、文明科学の知識だろうか。そうではない。正義という磁場ではないかと思うのである。人類史において、どこにいてもいつでも支配している正義という磁場ベクトルがあり、それが人類を守ってきたし、今も守っており、これからも守るだろう。

この世界は、弱肉強食という競争社会であり、その風が世界に吹きまくる。目に見えない力が支配する。誰もそれに抵抗できない。やがて、集団を壊し、個人を虫食って滅ぼすだろう。量と力だけに頼る機械のようになるからだ。一時的に勝ち誇ったように見えても、長い目で見ると滅んでしまう。人々はそれに食われまいとしてさらに大きな被害を作り出す。しかしここに正義という磁場が働き、それが人類を守る。

ドイツの学生に「神」と聞いて何を連想するか、と聞いたところ、90%近い学生が「正義」と答えたという。ナチス・ドイツを生み出した国民である。決して許されてはならない罪を背負っているだろう。忘れてはならない。

人間は機械ではない、正義という心を持っている。その正義が力を発揮する。正義のベクトルが生きているのだろう。この正義が国や子どもを守るのだと思う。

国から。家庭から村から教会から、学校から正義がなくなると危ない。機械になってしまう。どんな時代になっても、どこの国にいても、どの民族でも正義というベクトルが働くところで人類の希望がある。それを無くしてはならない。

## ✧ なんどきですか ✧

・秋も深まり、今年ももみじまつりの季節になりました。秋の京都の趣は特別ですが、この地域はまた格別のものがあります。

### ・反省のお言葉継ぐ即位式

昭和、平成の天皇が第二次世界大戦に対する「反省」のお言葉に思いを込められました。それを令和の新天皇も引き継がれたことは重い意味を感じます。世界平和のため尽くされることを期待します。

(by E.E.)

## ◇ おさそい ◇

10月7日(月)・11月11日(月) 13:30~16:30  
聖書をいっしょに読みましょう(第6回・7回)

講師: 榎本 栄次

10月12日(土) 13:00~17:30

修学院フォーラム「いのち」<第2回>  
「ゲノム編集の光と影」

講師: 中山 潤一 / 土井 健司

10月26日~27日(土 16:00~日 12:00)

開発教育セミナー <第4回>

「忘却を乗り越える~足尾鉍毒問題とフクシマ」

講師: 菅井 益郎

## 投稿 京都俳句きらら会他

- |                 |     |
|-----------------|-----|
| ・秋空に紅白の玉飛び交いて   | 茶香  |
| ・出迎えは黄色いカンナ無人駅  | 星児  |
| ・青き空掃き残ししか秋の雲   | 海楽  |
| ・晩夏の夕池にぼんぼり二つ三つ | 枯骨  |
| ・夕闇を招いて虫の宴かな    | 虚舟  |
| ・鄙の駅電車待つ間の虫の声   | 周豊  |
| ・爽やかに物忘れすら忘れおり  | 小次郎 |
| ・虫の音の遠くなりゆく眠りかな | 公女  |

## ♡ありがとうございました♡

### 関西セミナーハウス活動センターへの 賛助・寄付金

2019.7.1-8.31 順不同・敬称略

島田 誠一、浅野 献一、友前 尚子、丸山 まり子、桜井 希、  
北風 照子、網野 俊賢、関西青年アシュラム、高寺 幸子、  
徳丸 延子、菅 恒敏、田中 潤治、岡野 彩子、山崎 和明、  
武山 泰子、榎本 璋子、榎本 栄次、島田 恒、桃山アシュラム、  
日本基督教団西が丘教会、日本基督教団長岡京教会、  
奥田 豊、網野 俊賢、柳井 一朗、都木 かおり。

## 関西セミナーハウスの四季だより ~賀茂の振売り~

庭園担当 榊 廣光

38度越えの猛暑もいつの間にか通り過ぎ、関西セミナーハウス「修学院きらら山荘」界隈の草むらに静かに耳を傾けると今は虫の大合唱だ。暑さ寒さも彼岸までとはよく言ったものである。

朝いち、一乗寺の里の道を急ぐとき道脇にみずみずしい地野菜がささやかに並べて売られているのに気づく。産地直売だ。辺りを見渡すと段々畑のあちこちに貸農園が目に入る。野菜づくりを楽しんでいるようである。

京の野菜と言えば「加茂の振売り」を時々見かける。店頭販売ではなく、なじみの家一軒一軒を訪ねて売り歩く行商である。以前は大八車とか、リヤカーの記憶もあるが、今どきはみな軽トラックだ。大きな四角いプラスチック製のかごに水打ちした朝採り野菜を山盛り積み込み、売り歩くのである。今の時期は、そうソフトボール大の賀茂ナス、伏見とうがらしや壬生菜などだろうか。

商い主は上賀茂や西賀茂あたりの農家の主婦たちである。記憶に残る、以前のスタイルは、腰までの襦袢とたちあげと呼ばれるもんぺ様の袴、三幅前掛、手ぬぐいといった独特の出で立ちである。今は動きに適した服装のようだ。

この振売りは比較的のんびりとコミュニケーションをとりながらの素朴でかつ地域に密着した商いのやり方である。客はわざわざ店まで足を運ばなくても面前でいつも新鮮なよいものが手に入るというメリットがある。おしゃべりもメリットのうちだろう。でもストアーよりも値段が少し高めかも。

このゆったりしたのどかな文化はいつまでも残ってほしいものである。